



1月号

# ひだまり



今月のエッセー

## 猫の写真

昨年の夏頃、久しぶりに新しいカメラを買いました。持ち運びやすく、綺麗に撮れるのでとても気に入りました。今では毎日持ち歩いて、綺麗なものを、気に入ったものを撮っています。

最近近所の猫さんを撮ってみたいのですが、近づくたびに逃げられてしまいました。やはり一筋縄ではいきません。残念だなと思うと同時に、飼い猫を撮っていた頃が懐かしく思い出されました。

飼い猫は「ミイ太」という名前です。私が幼稚園児の時に家に来たので、飼っているというよりも兄弟のようでした。見た目は可愛かったのですが、中身は凶暴で気分屋。顔を近づけるとすぐに噛みついてきま

## ひだまり書房

### こころもからだも整う しきたり十二か月

著 井戸理恵子



みなさんはなぜ一月を睦月と呼ぶかご存知でしょうか。年が変わり、新しいことづくめの今月にぴったりの本がこちらです。著者の井戸さんは民俗情報工学研究者という聞き慣れない肩書きを持っていて、民俗学的な視点から日本全国の伝統儀礼や風習の本質を読み解き、現代社会に生かすことを目的に日々活動されています。本書は「暦」に着目し、十二ヶ月ごとにそのしきたりや行事、旬の食べ物などを素敵なイラストと共に解説しています。

暦はもともと「日読み」。文字通り日を読むことに由来するそうです。日読みという言葉に馴染みのない現代人にとって、暦はただの古いカレンダーのように思われがちですがそうではありません。生きることが決して当たり前でなかった遙か昔、先人たちがあみだした1日1日をよりよく過ごすための知恵なのです。

睦月は年の初めを親戚縁者と仲睦まじく過ごし、先祖のことや祖父母の思い出を語り合う時期を意味するそうです。年の初めにぜひ、ご一読ください。◆<sup>ほんだしんだい</sup>本田真大

## 編集後記

新年あけましておめでとうございます。皆さんはどんな新年を過ごされたでしょうか。私は毎年の年末年始に体調不良になりがちです。実家の宮城県に帰省するので、気温の差に身体がうまく対応できないようです。

それと今年も恒例行事がもう一つ。それは一月七日に七草粥をいただくことです。年末年始に体調を崩していることもあり、人一倍に「無病息災」の思いで手を合わせたいと思います。やはり、健康が第一だと思えば、新年のスタートを切ります。本年もより良い「ひだまり」を皆さんにお届けできるよう所員一同、切磋琢磨し、精進してまいりますのでどうぞよろしくお祈り致します。◆<sup>きくちしもん</sup>菊地志門

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

すし、抱っこをしようとしてもなかなかさせてくれません。

そんな猫だったので写真を撮るのも一苦勞でした。カメラを向けるとすぐにそばを向かれてしまいます。負けじと色々工夫をしている内にコツを掴んでいきました。片方の手で指をこすって音を出したり、ヒモをぶらぶらさせると興味津々な顔をしてくれます。そこを狙ってパシャッと撮ると、なんとも魅力的な写真が出来るのです。

ミイ太は私が大学三年生の頃に死んでしまいました。溺愛していた母からは「写真を撮っておいてくれたのがあなたの一番の親孝行よ」と言われました。おそらくそれは本心なのでしょう。撮った写真がプリントされ、額縁にまで入っているのですから。

良い写真とは綺麗さ、美しさという見映えにとどまらず、誰かを喜ばせることができるものなのかもしれません。自分のためだけではなく、他の人のためにもなる。今年はそのような写真を一枚でも撮りたいものです。

◆<sup>ひさまつしょうげん</sup>久松彰彦

# 法のお話



二年度  
やまうちだんじょう  
山内弾正

## すきとおる

私の大好きな詩人のひとり、「まどみちお」という方がいらっしやいます。童謡『ぞうさん』の作詞をされた方です。彼は二十代から作詞を始め、百四年の長い生涯の中で数多くの名作を残しました。そんな彼の作品の中に『どうしてだろうと』という詩があります。今回は、この詩を紹介したいと思います。

『どうしてだろうと』 作・まどみちお

どうしてだろうと おもうことがある  
なんまん なんおくねん  
こんなに すきとおる  
ひのひかりの なかに いきてきて  
こんなに すきとおる  
くうきを すいつづけてきて  
こんなに すきとおる

みずを のみつづけてきて  
わたしたちは  
そして わたしたちの することは  
どうして  
すきとおっては こないのだろうと・・・

この詩を始めて読んだとき、私は「確かにどうしてだろう？」と疑問に思いました。何故、透き通る日の光を浴び、透き通る空気と水に触れている「わたしたち」は透き通ってこないのでしょうか。

恥ずかしながら、私にはまだ、この詩の問いかけにハッキリと答えることはできません。しかし、この問いかけを考える上で、曹洞宗の教えがひとつの手がかりとなるように思います。道元禅師の著作である『正法眼蔵』の中にこんな一節があります。

感応道交するところに、

発菩提心するなり

簡単に訳せば、「私たちの心と仏の心が共鳴し合ったとき、仏の心（菩提心）は私たちの内に発（おこ）る」という意味になります。ここでは、身の回りがある仏の心に共鳴し気付いていくことが、自分の中

の仏の心を目覚めさせることに繋がるのだと説いています。しかし、私たちは普段の暮らしの中でなかなかそれを実感することはできません。周りにある仏の心はこの姿が、「すきとおる」もので溢れる世界にいなながらも、未だすきとおるこゝろが出来ない詩の中の「わたしたち」と重なって見えるのです。

まどみちおさんが「どうして／すきとおってこないのだろう」の答えをどのようか考えていたかはわかりません。しかし、自分を取り巻く世界が透明だと気付くとき、透明でない自身を自覚した彼の問いの「答え」は、先の道元禅師の言葉とどこか繋がると思います。

だからこそ彼は、この詩の最後を「・・・」で締めくくっているのではないのでしょうか。人それぞれ幾通りもの過程や手段で仏の心に共鳴し、自分の中にそれを持すように。ひとつとして同じ答えを持たない問いかけだからこそ、この答えは読者自身が探し考えなければならぬ。ここには、彼のそんな想いが込められているように思うのです。平成最後の年、自分なりの答えを模索しながら、「どうしてだろう」と問い続けたいと思います。

## ふかぜわりょうどう 深澤亮道の小唄

こばなし



皆さんにとって冬といえは何でしょうか？私にとっての冬は「雪」です。冬だから当たり前じゃないかと思われるかもしれませんが、私にとっては一年に数回降る雪ではなく、冬になれば二カ月は必ず立ち向かわなければならぬ敵のような存在でした。

私の生まれ故郷は岩手県花巻市という場所で、ちょうど県の中心に位置しています。東北の中心部を南北に二分する奥羽山脈に遮られるため、岩手県の積雪は日本海側よりも少ないですが、それでも毎年膝から腰くらいまでの積雪があります。

雪には様々な表情があります。たつぷりと降り積もった雪にカラツとした青空は白銀の世界、一面の銀世界などと呼ばれます。また辺りが暗い中、月が雪を照らし輝いて見える情景を、雪夜月と表現したりもします。雪はその時々様子で私たちに幻想的な世界を見せてくれます。しかし、大雪が降る地方の人たちにとって雪はそんな美しいだけのものではありません。

しんと降り積もった雪は屋根からドドドッと落ち、地響きを鳴らし夜中に何度も起きてしまうくらい大きな音を立てます。そして屋根と地面が繋がるくらい積もった雪で、家の中の光や音は遮られます。昼間でも外の世界と遮断された空間からは何とも寂しい感覚を覚えます。大雪が降ったところで学校が休みになることもなく、登校するために家の前や車の雪かきは毎朝の日課でした。

東京に暮らして早三年。ようやく雪に解放された生活ができるかと思っていたのですが、昨年は東京でも記録的な大雪に見舞われました。生まれてからずっと冬になれば付き合ってきた雪。敵のように思っていたのですが、ここまですずく雪と闘っている切っけも切れないくされ縁のような存在なのかなど思ったりもします。今年はまだ悪化するなよ、と願うばかりです。